

高校同窓生大石陽次君への手紙

grandpierre@nifty.com (大石陽次)

前口上

明善 38 会だより第 7 号で、『畑泥棒』大石陽次 (3 組) を偶然読む機会がありました。実のところ、田中豊は (6 組) 連絡先不明者として明善 38 会のホームページに名前が乗っていますが、この HP をひょんなことから見つけて時々アクセスしていました。私はかなり以前からインターネットにはまっており、何かにつけて暇つぶしの娯楽としてパソコンと遊ぶことが多く、自分の HP も持っていますし、メールアドレスもあります。もっとも 65 歳を契機に今年の 3 月末で大学を退職予定 (38 会だよりは今年度で退職の人がかなりいるようですが) なので、個人用と学校用と二つの HP を折々個人用に切り替えていく途中です。38 会の事務局に自分の現在の住所を連絡する気はなく、こっそり他人の動向や考えを眺めるのが面白いので、何はともあれいろんな情報に目をやっていたのですが、明善 38 会だより第 6 号、7 号掲載のどの文章も今ひとつの感 (横着かもしれませんが、個人的感想です) を抱く中で、『畑泥棒』だけは特別興味をそそられました。38 会だよりの中の各人の文章を見るにはパスワードが必要ですが、これもあるとき偶然発見しました。私はそれからか、そのちょっと前からか、いわゆる「同窓会症候群」にはまり始め、小学、中学、高校、大学の出身学校をキーワードに、意味もなくインターネット上で検索を繰り返し、卒業写真を引っ張り出したりしながら、記憶のすみに残る様々な出来事や人物と仮想的想像上の再会を果たしつつ時間をつぶしておりました。これには私の奥さんの影響もあります。実は彼女の許へ高校の、それも進学のための特別クラスだった同級生から電話がかかってくるがありました。それまで連絡先不明者として扱われていたらしいのですが、ある彼女の友人の骨折り (実家への問い合わせ) で住所と電話が判明し、連絡を受けた彼女は、それまで一度も同窓会に出席していなかったものの、どうした風の吹き回しか、気が変わったようで、高校 3 年生の進学特別クラス (女子は一桁の人数) の同窓会に出席、その結構面白い報告をいろいろ聞いている内に、ユタカ君も症候群に落ち込みました。そしてつい最近、ユタカ君にも小学校の同窓会案内状が舞い込みましたが、出席の返事は出さずに放置したままになっています。その同窓会に出席することもないでしょう。出席する気はないのに、以前送付されてきた小学 6 年月、雪、花組の (まるで昔のガリ版刷りを思わせるような) 住所録を眺めながら、町村合併が進み、かなりの訂正が必要になっている等と思いつつ、写真帳も併せて引っ張り出し、同窓会症候群的、懐古的時間に潜り込んだ次第です。

福富健二君の連れ合いと、私の奥さんは実を言いますと松川家の姉妹であり、健二君と私は義理の兄弟 (あるときの健二君のお母さんの言葉) になります。私の奥さんと健二君の連れ合いがたまたま電話で話したとき、大石陽次の『畑泥棒』が面白かったとユタカ君が述べていたと伝えたようですが、それを聞いて相手は、ちょうど「ちゅうちゅうまんげのぼうめいて」という詩集が 10 冊ほど送られてきたので、その一冊をこちらへ再送するとの話に落ち着き、私にもその詩集が手にはいることとなりました。これが詩集を入手した経緯です。メールアドレスも『畑泥棒』にフランス語の「大石」で書かれていたので、感銘した詩集の感想を書き送りたいと思いました。しかし彼は再手術で 2 週間は入院と聞いたので、その間ゆっくり感想文を書き続けることができると考え、毎日、少しずつ詩集を読み続けました。

ところで「同窓会症候群」について、私なりの勝手な解釈を書いておきます。私がこの言葉のイメージから引き出す語感、は、「パニック症候群」と同じようなマイナスイメージです。日常生活への障碍が顔を出すからです。実は何々症候群という言葉は、最近無造作に使用されるので本当は好きでないのですが、どうして同じ学校ガレ船に繋がれた同級生が、同級生だったというだけで何かの情緒を共有するように思いつ話に花を咲かせ、喜ばしげに若かりし頃の振る舞いに懐古的視点を向けるのか、その理由がよく分かりません。老人は懐古的時間を生きるのは当然ですよと言われればそれまでですが、孫たちの世代が前進的時間を生きることも限らないのですから、時間の構造に対する感覚的違いなのかもしれません。もちろんテレビドラマ的な懐かしさに対する無条件の承認が、何か悪いことを引き起こすわけではありません。確かに私は飲み屋などで久留米の明善高校出身などと、場合によっては得意げに話すがありますが、その後必ずと言っていいくらい、明善の劣等生 (事実です) だったと付け加えます。筑後一円における明善高校の令名は高く、その出身者であることは、社会的名声に近い効果と効能を持っているのかもしれませんが、誇らしげな面持ちとは別に、それに見合うだけのものを自分が獲得できているわけでもなく、または密かに思慕していた嘗ての彼女あるいは彼に再会することで、いったい何が起こると言うのでしょうか？後ほど追々述べますが、同窓会症候群とは、共有したと思える体験を再び仮想的な舞台上で生き直すことだとしても、その内実を詳

しく表現しなければ無駄話と徒労に終わることは間違いありません。もちろん同窓会で再会した彼と彼女の新しい旅立ちがあるとすれば、それはそれで慶賀すべきでしょう。特別の時間が同窓会にあるという前提は、私の感覚にそぐわないのです。今現在の一日と、過去の一日と、また将来のいつか一日の間にはナンの相違もないのではないのか？これが同窓会症候群に対するとりあえずの設問です。

「ちゅうちゅうまんげのぼうめいて」

詩の言葉は朗読されることを前提とすると考えると、当然ながら音声としての機能と働きを第一義的に顧慮しなければならない。それは実際、声に出して語ることを意味するであろう。従って黙読はあり得ないのであって、音声学の言葉の響きが重要な役割を占めることとなる。幼少より慣れ親しんできた方言的言い回しは、標準語への学習の前に必ず心の奥深くに保持されているのであるから、同じ地域に暮らす者にとっては、自然な感覚で受け止めることができるものである。書き言葉ではなく音声的な響きに重点を置くことは、言葉本来の姿に回帰することでもあろう。しかしながら、方言的表現は理解という点でその地域的空間を制限するものであるから、どれほどの他者が理解できるかどうかが二次的な問題点となる。なぜなら理解できない言葉は、外国語と同様に習得の過程を必要とするし、必ずしも学習によって理解可能な地点まで到達するとも限らないのであるから。では方言的言い回しの表現を、その地域的制限から解放して、他の近隣地域の者、さらには遠方の広い地域の者にも理解可能にするにはどうすればいいのか？妥協的産物かもしれぬが、標準語的表現と方言的表現を、前者に重点を置き、上手い具合に混交すれば、その方言的表現に慣れ親しんでいない他の地域の他者にも、理解できる余地が増大する可能性はないだろうか？方言的言い回しを主にするのではなくて、標準語的言い回しに、地域的方言を部分的に都合よく組み込むことが要求されることになるのではないだろうか？

ドイツ語の詩作品においては、詩の言葉である単語の選択に関して、当然とはいえ、伝統的に脚韻や頭韻といった音声的要素が、意味内容との深い連関の中で使用すべく模索される。文芸作品は詩に限らず小説の一節や部分的章節などが、文学サークルなどの聴衆の面前で朗読されることが多いのは、耳で聞かれる言葉の音声的要素、つまり音響的言葉の響きが重要視されている証拠でもあろう。また音としての響き、つまり話し言葉ではなくとも書き言葉を話し言葉のレベルでも再検討し、その音響的効果を実際に体の五感の一つで感じてみなければならないという作者の姿勢は、語ることと書くことを別のことだと捉えるのではなく、連続的視界の中で検討しようとするということでもあるだろう。

だとすると、方言的な、ある地域限定の言い回しの表現を、書き言葉である詩作品の一部の語彙表現として使用するのには、この語りと書き言葉の微妙な関係を意識した実に巧妙で優れた表現方法であるといえるのではないだろうか。

話は違うかもしれないが、外国語習得の過程では、特に古い方式である内容理解に傾斜した講読一辺倒のやり方では、言葉本来の音声的理解からほど遠い地点での勉強に過ぎず、意味内容に偏った文章理解ばかりを押し進めることで、言葉を音声として感じ取るという肝心かなめの言葉に対する感覚的理解をすっ飛ばすことになる。母語習得の場合を考えてみれば、ことは単純きわまりないほど反対の道をたどっているのである。幼子は母の語りかける言葉を、すなわちドイツ語では文字通りの *Muttersprache* を母語として耳に聞く。その後、特に学校教育の場で、音声として語られる母語たる言葉が書き言葉として学習されていく。ちょうどその反対の課程を、大学や高校での第二外国語の勉強の習得の場で行っても、言葉が生きた言葉として、感覚的に自由に使い回せるほどの習熟に至らないのは当然であろう。

西ン空ン正平さん (西の空の正平さん) (くるめんもん=久留米の人)

木橋バ渡って (木橋を渡って) (本バ読まんの=本を読みなさい)

キツカ坂道バ (苦しい坂道を) (意地にも我にも百里足らず二日にはキツイ道)

池のあろガ (池のあろうが) (ガ=接続助詞、「が」のあとを表現せず、言いさしのみで、相手の反応を待つ気持、または軽い感動を表す。)(試してはみまずガ)

なんのためにあるかチュウと (なんのためにあるかと言うと) (チと同意) (何チュウこつじゃるか)

冷たカ水ば貯め (冷たい水を貯め) (メズラシカ=珍しい)

日で温めチ (日で温めて) (腹けえチ飯も喰わん=腹を立てて飯も喰わない)

五枚しかナカ（五枚しか無い）（ナカもんなナカ＝無いものはない）
 流しヨルとタイ（流しているですよ）（食いヨル＝食べている。勉強しヨル＝勉強している。燃えヨル＝燃えている。）（そげんじゃなかタイ＝そうではないんだよ。あたしがしたタイ＝私がしたんですよ）
 ダリが掘ったモンか（誰が掘ったものか）
 米バ食いタカー心で（米を食いたい一心で）（見タカ食いタカ＝見たい食いたい）
 石積みしたつジャロねえ（石積みしたのだろうねえ）（食うジャロ＝食うであろう）
 育てチ（育てて）
 害虫も食ってクルル（害虫も食ってクレル？）（動詞連用形＋「て」を受けて、好意をもって……する意。）
 まるまる肥ったヤツバ（奴を）（偉い奴にはかなわない）
 正平さんが家タイ（正平さんの家だよ）（そげんじゃなかタイ＝そうではないんだよ）。
 ナンもセンで（なにもしないで）（センとばシタチ＝しないのをしたと）
 歳とってしまワシタ（歳とってしまった）（軽い敬語）
 めずらしカ（珍しい）
 昔からアゲンして（昔からあの様にして）（アゲンカこつあ言い切らん）
 挨拶ばセラス（挨拶をなされる）（敬語、お父ちゃんのセラスと助かるばって）
 アセガリヤーンズ（あせがる？）（アセルの転意？＝人に負けじときそひて心を遣い気をもむをいふ）
 （汗が出ますね??）
 いつもんゴツ（いつもの如く）（馬んゴツ喰うた）
 正平さんナ（正平さんは）
 ガーンズ（……あります。敬語ござんすの転。）（藁なら小屋にガンズ）（どうかお願いでガンズから、命だけは助けてください。）
 ドゲナふう（どの様な）（ドゲナモンデン銭になる）
 ジャロカノー（……であろうか。）（食うジャロ＝食うであろう）（ノー＝疑問？）
 大雨の降るチュウたコツは（大雨の降ると言うことは）（コツ＝こと）
 なかデッショばって（なかでしょう）（バッテ＝バッテン＝……けれど）
 様子ば見ますケー（ケー＝……から、……ゆえに、……ケンに同じ。）

『筑後方言辞典』（松田康夫著、久留米郷土研究会発行）で単語を一語一語調べ、その用例を探しながら詩行を読み進める作業は、外国語の勉強に似ていないだろうか？しかしその内実と中味は全く異なる。なぜなら外国語講読作業の場合は、実際単語の意味内容が分からないから辞書を引いて調べるのに対して、方言を読む場合には、最初からその文章の意味内容は把握できているものを、更に正確を期すため、単語に分解して理屈として理解するという、逆の道をたどるからである。而してこれで何か生じてくるかと言えば、今までぼんやりと無意識に分かっていたものを意識的に了解するといった、本末転倒的理解の仕方が招来するが、これがそれなりに結構面白い。

無意識の理解とは文脈からの自然的了解だとすれば、方言的単語の思わぬ用例と二次的三次的意味内容の明示が、新しい言葉の地平を開示するように思われるのである。

15 行目の終わり方？（焼いたり煮たりして楽しむ。）（焼いたり煮たりスルモンノ。）

往還の郵便局員

物語り手＝第三者的語り手ではなく、詩作者である聞き手に向かって語りかけるばあちゃんという特殊な存在者。しかも聞き手と語り手の間の親密な（第三者の入り込む余地のない）関係を示すための、一種二人の間だけで通じ合うような、方言的獨特の語り口。

気の触れた者は「笑いも、泣きも、怒りもせん。」のは何故だろうか？ひたすら内面に向けられた意識は、外部の他者に向かうことはないのだろうか？だとすれば、外部を観察するとは自分の内部を無視することと同義なのだろうか？内に向かう意識の領野には、他者が入り込めるような対話的部分は存在しないのだろうか？

焼かれた丑蔵じいさん

丑蔵（ウシゾウあるいはチュウゾウ）の読み方？詩行は音を出して読まれることを前提とすると、人名あ

るいは漢字にルビを振るのにも一理あるだろう。しかし読み方は読者に任せる、つまり選択の余地を読み手に与えることも、逆に詩行の自由な読みの解釈を許容するのだとすれば、それなりに面白い。

「おりが死んだら火葬にはせんでくれ、熱かけん土葬にしてくれ、ち、言わしたげなたい。」
死後の想像世界も現実の生きている時間と継続的關係の中で捉えることができるためには、此岸と彼岸を同一的地平上で考え得る、豊かな文化的死後世界のイメージが、思考のバックグラウンドとして必要であろう。「ばあちゃんの死」の一節、「ばあちゃんが死ぬとは、浄土に生まるるのと同じこつたい。」「眼、耳、鼻、舌、身、意、の六根の汚れででけた業ば滅し去り、輪廻ば絶ち切り、死に切るもんが、浄土に生きるこつができる、ち。」

西洋的視点で言えば、死後の復活の儀式が重要な宗教的土台として考慮されているからかもしれぬが、仮死の自分がそのまま葬られるかもしれぬ恐怖から、自分の遺体を針で刺すことを実施してもらいたいと述べた、ある詩人（ゲオルク・トラークル）のことが不思議な感覚として思い出される。火葬を嫌い土葬の後にも、復活によってこの此岸の地上で再び生きるとは、限りある人生を生きるに過ぎない人間の、単なる妄想の域を超えた宗教的欲張り根性に過ぎないのでは無かろうか？

岸本英夫は宗教学者として当時それなりの活躍を見せていたが、ガンに冒され自分の余命を知らされることとなった。その時、自分の専攻した学問としての宗教から何も獲得することができず、死の恐怖にとらわれ、その経緯を書き記そうと試み、実際、本として上梓もした。それを讀んだ同じ東大のイギリス文学専攻の中野好夫は、人間の死と昆虫の小さな死と、どこに違いがあるかと、冷たい感想を述べた。とまあ何十年も前に讀んだ岸本英夫の、確か講談社文庫だったと記憶するが、ある種のショックを受けた経験が何故か思い出される。理由はいろいろ述べるができるし、死の恐怖心が、心気症的不安の域を遙かに超え、自己コントロールをはみ出したことは確かではあっても、読むことによる気休めが訪れることはなかった。中野好夫の『人間の死に方』はずっと後になって読むことになった、これも感銘を受けた書物だが、詳細に著名な文豪たち一人一人の行く末を辿ったものだと記憶する。また渋沢龍彦が、ガンの病を得て、入院先の病院で見た幻覚をさり気なく文芸雑誌に載せていたが、その自我的執を越えたひょうひょうたる記述に、これもある種の感銘を受けた。あるいは手塚治虫の『火の鳥』で描かれる広大な宇宙に漂うような人の魂が、チリになって茫漠としてきらめく様も興味深いものだった。などとユタカ流に解釈したイメージを描いていると、これまで随分と人の死に関心を抱いてきたことが不思議なくらいである。当然ここにはニヒリズムとその克服の問題が隠されているのだろうが、日本的な解釈として納得いく記述にこれまでお目にかかったことがない。ノンチャラスなニヒリズムの克服などあり得ないのだろうか？ある無名作家を集めた『存在の探求』という平凡社シリーズの中に収録されていた、『競輪必勝法』という小説にはいたく感動した。世の中には人知れず素晴らしい作品を書いたまま消え去っていく人間がいるのは、間違いのない事実である。しかし当然ながらそれを探し出す人物も存在しなくてはならず、時が流れても流れないまま存在するのは、哲学だけに限らない。言葉を使って叙述された奇妙な生き物、物語の世界だ。あるいは江藤淳が奥さんの病死を契機に、自殺したときにはいやな感慨に捉えられた。あれほどまでに論戦好きの論客に変貌していた男が、余りにもあっけなく妻への愛に殉死するとは、と啞然として開いた口がふさがらなかった。昭和 45 年、大学紛争盛んなりし頃、大学院に在籍したまま学校はバリケード封鎖され、ぼんやりとノンポリ学生生活を送っていたユタカ君は、三島由紀夫の割腹自殺に強い衝撃を受け、その後の様々な識者たちの論評を読みふけたが、すっきりした回答を発見できないまま、今でもその出来事がよく分からないのは人生の謎かけゲームのようなものだからだろうか？もちろんその間、父親や母親の葬儀を通して、浄土宗とのつきあいを経験させられたが、常にやむを得ぬ受動的体験に過ぎなかった。これからも宗教に対して向き合う姿勢には、何ら特別の変化は訪れないであろう。

「体験話法」とは、話し手が第三者の言説を、あたかもその人になり代わったごとく、その人の立場から断定的にのべる「間接話法」である。

体験話法(Erlebte Rede)を扮役的語法と最初に名付けたのは、ドイツ語に堪能だった関口存男で、この言葉は彼の造語？だと思われるが、考え方としては非常に面白い。演劇上の役を演じるように役者として行動しながら、語り手と一体になって物語るのである。つまり語り手がいつの間にか語られている物事の現場、現状に赴き、その場で一緒になって実際の体験をしながら、しかも語り手として第三者に向けて物語る語り方なのである。過去のことを語る際に、時制として過去形を使用せず、現在形を使用する場合、これを歴史的現在などと呼ぶが、その中味は、当事者として現場に立ち会い歴史的観察者として、歴史における時間的距離を短縮してしまうことを意味する。百聞は一見にしかずと言うが、現在の出来事を眺めているということ

は、何を語ろうともその真実性のある程度保証することとなるのだろうか？しかし問題の本質は、時間の問題に還元されるであろう。すなわち思い起こす、回想するということがいかなることなのか？過去の出来事に向き合い、それを記憶の中から呼び起こすとはいかなる時間的操作用なのだろうか？

これは哲学者、大森荘蔵の「時は流れず」から教えられたことであるが、思い出す、思い起こす、回想するとは、当事者がその過去の現実的場所に赴いて過去の時間を生き直す、あるいはもう一度生きることであるのではなく、過去の現実がそのまま現在に立ち現れるというだと考えると、現在の生きている時間の出来事の体験とほとんど変わらないのである。つまり「時は流れず」、過去も現在も同一平面上に再現されるということである。では過去の出来事を回想するとは、過去の時間が立ち現れることであるとして、それを物語るとはいかなることであろうか？やはり体験話法的に言えば、その現場で立ち現れた過去の時間を主人公として現在再び生き直しながら、それを第三者に伝達したいという欲求から出来事を語るのである。

25 行目から 28 行目まで、同じく 29 行目から 34 行目まで、また同じように 35 行目から 39 行目、40 行目から 45 行目まで、最後は「..... タゲナ」(..... だったらしい) で終わっているものの、本来これは体験話法的に言えば、不必要かもしれない。なぜなら、読者は当然の如く、語り手に誘われつつ、聞き手の作者と同じように戦地に赴き、歴史的現在の場所に立ち会っているのだから。しかも間接引用に終わるよりも、直接その場に立ち会うことによる現状感は当然ながら強度を増すし、ともに現在として体験することによる戦慄も増大するのだから。

鉄蔵さんの食事

「だれがケチちゅうて、鉄蔵さんにやかなわんばい。」「くさくさしたけん、きのうの晩な思い切って、つけもんに醤油ばかけて食うたとですよ。」

醤油と味噌は田舎モンにとっちゃ、これ以上なか贅沢品に違いなかと？つけもん漬けは、けっこう手間ヒマのかかる作業じゃけん、だいで簡単でできるもんでもなかつたかいの？そいにしても、塩のきいとる漬けモンに、醤油ばかけるっちゃ、ちょっとばっか、からすぎやせんですかいの？

村から消えた光男しゃん

ユタカ君はある理由で小郡から現在の住所、須恵町に移り住みましたが、この地で初めて夜逃げを知りました。時間も「三日前の朝の四時ごろ」だったのかもしれませんが、突然すべてが消えて無くなったような印象で、ある建築屋一家の突然の消失が、近隣の人々に驚きを持って受け止められました。「リヤカーの荷台」は、ユタカ君が畑仕事を終えた両親と一緒に、夕暮れ時の田舎道を帰路につくときの特別席でしたが、まだ自家用車も持たないユタカ君が、足が悪く歩行困難な母親を病院へ連れて行くときの、便利なゴムタイヤでできた 4 輪車でもありました。リヤカーは連想的に大八車を思い起こさせます。その上には死者が寝かされているのですが、葬儀の列ではなく、病院から家路を辿るたった今この世を去ったばかりの死人の姿なのです。これは幻想に過ぎません。しかし幼い子供の網膜に焼き付けられた幻覚かもしれません。もちろん夜逃げ一家のうわさ話は、その後、長い間語り継がれました。公民館建設を請負ながら、各業者への支払いを済ませていなかったことなど、かなり詳細な話でした。同じ隣組に所属していたために、一家の具体的な人物の一人一人について、その後の消息を知りたいと思いましたが、当然ながら、杳として知りません。その後放置された家屋敷は、いつの間にか新しい買い手によって建て替えされ、何事もなかったように静かに沈黙しています。「ここんにきでは、夜逃げしたもんば追いかくるごたるまねはしちゃんらん、ちゅうとが、昔からのきまり」かどうかはわかりません。何故とって、新興住宅地として高台の小さな山を切り開き、あちこちから宅地を買い求めた人の寄り合い住宅地だからです。奇妙にも、就学児童の年齢の近さから、近所づきあいは割合親密で、和やかなものがあり、それなりの和気藹々の雰囲気醸し出してはいましたが、子供が成長するに従い、疎遠なつきあいに変わっていきました。

藤吉が家の火事

「余計な口出しはせんでもらえんですか」と言ったか言わないか、ユタカ君の一回りも歳の違うセンスケ兄は、一人暮らしを初めて何年になるか、毎日強靱とはとても言えぬ弱い身体に、強か酒ば流し込み、最後は肝硬変で身動きもできんようになり、それを聞きつけたツギヨ姉は、どうしたもんかいの？電話を寄越すも、最後の面会に奥さんの洋子さんと二人の子供たちだけを寄越し、ユタカ君は会うことも無かりし。明治 33 年、ちょうど西暦 1900 年生まれの父親の死後、財産分与を巡って 3 人の子供と母親で争いごとを一寸だけ

繰り返しては調停の家庭裁判所に出頭しながら（もっともユタカ君は女性の弁護士に一任して出頭せず）、それなりの決着後、たたき売られた生前の家屋敷は駅前の小さなビルに姿を変え、僅かばかりの家賃収入でその日暮らしをする独身男にとって、世界はのろいと呪詛に満ちた顔を見せ始めたのか、馬鹿野郎を馬鹿の一つ覚えの如く繰り返し世界に向けてつぶやきながら、60 を少し越えたばかりの一生を終えたのでした。しかも本人が住居にしていた狭い階段のビルから、その屍をやっとの思いで運び出し、姉の家に落ち着かせ、生前、どうした訳か久留米大学医学部と献体の約束を結んでいたがため、仮葬儀を簡略にすませ、引き取りに来た大学職員に引き渡されたその骸の行く着く先については、知ることもなく、その後、文部大臣より受けた医学教育への貢献に対する感謝状を受け取ったのは、やはりユタカ君でした。アルコール依存症のユタカ君が、センスケと同じ道を辿るかどうか神のみぞ知るですが、いずれにしても孤独であるとは、人生の本質ではあれ、やはりほんわか人生をある程度は許容しながら生活する度量とタフさも、人が生き延びる智恵ではないでしょうか？

幽霊

小学校の同級生に「幸子」という名前の女の子が存在した。大工の父親が突然無くなり、名前負けしたのではないかとユタカ君は思ったことがある。親は誰でも子供の幸せを願い、その子にこのような名前を付けたに違いない。しかし「幸福」とはいったい何であろうか？幸福願望とは何か？あまりにも過酷な現実を目にして、我々はいかなる態度を求められるのか？三島由紀夫だったか、この世には二つの考え方しか存在しない、つまり楽天的か悲観的か、オプチミスティックかペシミスティックかいずれかだと。確かにそうかもしれない。しかし我々庶民の感覚から言えば、悲観的考えにとられることの方が多くはないだろうか？なぜなら弱い人間は（何が弱いのか？）いつも悪い結果の方に自然と目が向くのだから。その結果、これはもっと悪いものと比べれば、まだ悪い方には分類されないのだと、無理矢理自己を納得させる。いわゆる強い人間は、物事の本質が見えないから、世界の実相から離れた地点しか見ないから、プラス思考などと言いつつ、楽天的世界を夢見ることができないのではないだろうか？そしてもっと悪い結果を引き寄せたとき、初めて悲観的考えを抱くようになるのだ。

グリム童話の「ヘンゼルとグレーテル」は、けなげな兄と妹が継母に捨てられるお話である。何故、継母がここに登場するのは語られない。夜中、子供を捨てるママ母と父親の密談を子供が聞く段取りになっているが、それでもお兄ちゃんのヘンゼルは、少しも悲観的考えにならず、それとは無縁の子供らしい生き延びる術を考える。これは子供の頼りない世界ではなく、非情な継母に抵抗する子供としては強い精神の表れであり、感動的物語になっている。しかもその話を支える悲哀とも言える情感は、最初の間だけ、僅かに読者の心をかすめるに過ぎない。いったいこの強靱な現実適応の態度はどうやって育まれるのだろうか？

電球の点いた村、電気泥棒

電球のなか生活は体験したことがなかもんね、ち、「チボ一家の人々」を読書中の洋子ちゃんに語るともなく語ると、うちのばあちゃんの大分県耶馬溪村の守実（もりぎね）じゃ、電気がなかったモンね、ランプば磨かりござシタモンね、ち、返事が返ってきました。小郡村は水飲み百姓は多かったようでありんすが、西鉄電車も早くから開通しており、父親の話では墓地の一部が電車の通り道にかかるというので、西鉄さんと交渉したことがあるものの、馬鹿正直モンは損をすることを身をもって経験したそうナ。なぜなら最後までごねたおっさん連中は土地の買い取り価格が全然違っていただけで、これは父親の心に深く刻み込まれたようでした。ついでながら、私が「父親」あるいは「倉吉さん」と言うのを耳にした、あるいとこに当たるかなりの年のおっさんは、父親の何周忌かの法事の席で、何故「おやじ」と言わないのかと詰問するような、蔑むような眼差しを向けてきました。その時ユタカ君がなんと返答したのか、今は全く記憶にございません。ともかくユタカ君は電灯のない生活体験がないのです。風呂のない生活、テレビのない生活、車のない生活体験はあるものの、もっとも畑泥棒ではありませんが、畑の植木泥棒に出くわしたのは月夜の明々とした晩でした。まるで明かりを必要としないような夜でした。父親は福岡市の市場まで、剪定した切り花を自転車に積み込み、出荷して生活の足しにしていたのですが、切り花泥棒は勝手に真夜中それを切り出していたのです。追いかけて回したかどうかは覚えがありませんが、追いかけてという言葉で別の泥棒を思い出しました。往還をばたばたという足どりが聞こえ、その後を何人か追跡しているようでした。果たしてその泥棒が捕まったかどうか、これも覚えがありません。しかし実際に捕まった泥棒を別の機会に見たことはあります。いったいユタカ君は何を語っているのでしょうか。奇妙にも真っ暗闇は存在せず、じっと目をこらせば、どんな暗闇からでも必ずものの輪郭が見えてくることを語りたかったようです。深夜、人が寝静まった頃、

人気のない墓地巡りにとらわれた時期がありました。実にすがすがしい空間で、お化けの出る余地などありませんでした。

「息ば殺すごつして糸ば張り、杼（ひ）ば投げた。」

杼（ひ）＝機織り道具で、横糸を巻き付けるもの。

たんものおり

ユタカしゃんな反物織の現場を見たことがなかけん、何とも言いようがなかつとバイ。従って、以下の記述は、沖縄に寄港する大型客船の通訳ガイドとして、福岡空港から沖縄へ飛び、ガイドツアーを頻繁に行っている洋子さんからの情報です。琉球石垣島のミンサー織りは、鹿児島薩摩藩（島津）が琉球を統治していた 17 世紀初めごろ、その島の女の子がある程度の背丈以上になると（島にはそのための基準となる大きな立石が今でも残されています）織物を織り、租税として納付しなければなりません。木綿糸を植物の染料で染めた丈夫な織物で、主に帯として使用されます。特徴的な柄は、4 つと 5 つの小さい四角形の模様を組み合わせたデザインで、「一生一緒に」の意味を持ち、好きな男性への贈り物にするとされていました。

へらくちに咬まれたじいちゃん

いつの頃からか、側溝みたいな小川の流れるあぜ道を歩いていると、足下に蛇がとぐろを巻いており、びっくり仰天して飛びずきると、後ろにも蛇が二三匹忍び寄り、咬まれるのではないかとの恐怖心から目眩がしそうになり、戦きつつ夢から目覚めることがしょっちゅうあるようになりました。しかも繰り返し同じ夢にうなされるのです。ユタカ君は実際に蛇に咬まれたことはありませんが、鶏を飼っている鶏小屋に青大将が大物顔で姿を見せ、ぞっと背筋に冷たいものが走る経験は何度もありました。鶏の餌として、その食事係を請け負わされていたユタカ君は、雑草の生い茂るあぜ道などで勝手に草葉などを刈り取ったりしていました。昔から蛇が嫌いな者は、蜘蛛が何ともないし、蜘蛛を怖がる者は蛇を見ても何も感じないと言われます。それが本当なのか知りませんが、ユタカ君はどんな蜘蛛を見ても恐怖にとらわれることはありません。子供の中でも、蛇の尻尾をつかみ、ぐるぐる回しにしながらその命を無造作に取ることでできる者がいました。触るのもできない者にとって、その光景は虫ずが走る奇怪な恐怖心を垣間見させる場面として、意識の奥深くに痕跡を残したのかもしれませんが。残酷な振る舞いも蛇に対しては許されるのだと言わんばかりの態度は、どこから子供心に植え付けられたのでしょうか。蛇に対する恐怖心がなせる技だったのでしょうか？

ちゅうちゅうまんげ

この「ちゅうちゅうまんげ」は、先述した渋沢龍彦のガン病棟での随想を思い起こさせた。死期の近いおのれの病状を実に無造作に、我執を離れて記述できる幻覚的光景に対する偏愛は、渋沢お好みの題材だったろうが、このような態度を取ることができた彼の精神的強靱さは、普通の理解を遙かに超えるものである。もっともその後、ある偶然から矢川澄子が渋沢の前の連れ合いであったことを知ったところから、意外な結末にたどり着くことになった。矢川澄子訳のプレヒトの『暦物語』は、以前から何となく所持していたものの、読むこともなく本棚に飾られたままになっていた。洋子さんがヨーロッパ旅行で 20 日間ほど家を空けることになった 9 月のこと、たまたま目にとまったその本を読み始め、矢川澄子をインターネットで調べてみると、まあ今は便利な時代ですね、いろんな面白い適当な情報があふれているではありませんか。しかしこの続きはユタカ君だけ興味のあるガセネタに近いものですから、そこは適宜、端折って先へ話を進めます。渋沢は山口の瑠璃光寺五重の塔前で、追い出した矢川澄子の後の奥さんとツウショットの写真を撮っています。この女性がまた美人で、やはり一流の文学者には素晴らしい女性が引き寄せられるのかと、我々の垂涎的ではあります。ユタカ君の想像のなかでは、前の女を追い出したことを、渋沢はあっけらかんと書き記しており、しかも矢川澄子のような美人とは思わせない表現になっていたのです。とまあ覗き趣味はこれにて終わりにします。お粗末でした。と書きながら.....

ところで森鷗外の「山椒大夫」には姉弟の二人の子供が登場する。「安寿は姉娘、厨子王は弟の名である。」矢川澄子は渋沢のことを「お兄ちゃん」と呼んでいたらしい。ヘンゼルとグレーテルにしろ、この兄と妹、姉と弟のきょうだい関係には、特別他人が窺い知ることのできぬ秘密めいたものがあるようだ。それも 3 人とか 4 人きょうだいとは違う何か。しかし鷗外の筆致は冷酷な眼差しで、淡々と書き進められていく。これはグリム童話が残酷だ等という了解を遙かにしのいでいる。独文学者の高橋義孝が、鷗外をニヒリストと

とらえたのには訳がある。単にその鴟外の遺書から伺えるだけではないのだ。膨大な文章のあちこちにさり気なくちりばめられた、奇妙に冷酷な洞察力というか冷たい視線を感じ取れば、十分、高橋義孝の意を汲みとることができるであろう。

掘り出しもん

幼少の頃、田舎の村々では三日市ちゅうモンがあって、往還に店がずらりと並んでおりました。その中にカルメ焼きや綿菓子、椎の実を煎ったやつ、等々、子供がつい手を出して買って食べたいものと並んで、有田焼の安物の陶器店がありました。田舎で日常使用する雑器類を並べ、交渉によっては幾らでも値切ることができました。どういう経緯か、この店の親父は、三日市の間、我が家を宿泊所として商いをしておりましたが、いつも商売が終わる最終日には、陶器をお礼代わりに置いていくことが習わしになっておりました。その後、有名な有田の陶器市に出かけることがあっても、嘗てのあの親父を探して訪ねることもなければ、そもそもどこの誰であったのかも知らぬママ、月日は無造作に経過して参りました。陶器が日常の食器として使われることが当然ではあっても、高いべらぼうなお金で名品を買うこともなければ、その趣味も解せず、いわんや家の財産として手元に置くなどと考えたこともありません。それもそのはず、嘗てあの親父たちが売りさばっていた陶器類は、日常の生活で使用する雑器類に過ぎず、そこから美術工芸品等という高尚な概念が抽出されることもありませんでした。それがいつの頃から変質していくのか、多分経済的発展に伴う購買意欲と密接な関係があるのでしょうか、これは幾らした、あちらは幾らのものを割合安く手に入れたなどと、金勘定をし始めたのは、それなりの庶民的余裕と誇りを示すためだったのでしょうか？そうは思えません。基本的にお金に勘定し直す作業は、どこかで道がずれているのです。金持ちの道楽はけっこうですが、あくまで生活必需品としての機能からずれる感覚は、我々庶民には肯けません。もちろん地獄の沙汰も金次第ですが、ポケットから何十万、何百万円もする茶器を取り出して、地獄の鬼どもに見せても、極楽への道しるべを教示してくれるなどという効果があるのでしょうか？

キャラメル

近所にある雑貨屋のよろず屋には、一個一円のあめ玉から、宝くじ付きの甘納豆など、様々な子供の気を引くお菓子類が並べられていました。声を掛けて誰も出てこないのが分かったら、あたりの様子をうかがいながら、こっそり店頭からお菓子を失敬したりしたもので、それが万引に当たる悪いことだとうすうす知っていても、甘菓子の誘い出す欲望には勝てませんでした。なぜなら手にしている五円玉とか十円玉も、やはり母親の財布からこっそり盗み出したものだったからです。煎餅にキャラメルは子供の欲望そのものだったといえましょう。おのれの欲望を制御できる年齢に、人は到達できるのでしょうか？それは何歳になろうとも不可能なことであり、あたかも構想だけで生き続ける何時までも書かないし、書くこともない作家みたいなものです。ところでユタカ君は、いわゆる「未完小説」に関心があります。水村美苗が書き継いだ漱石の「明暗」、誰かに乗り移って書き継いでもらおうとした埴谷雄高の「死霊」、ロベルト・ムジールの「特性のない男」などなど。しかし「死霊」は今のところ興味を無くしたので、ムジールを読んでみようかと考えています。彼のドイツ語は屈折した思考を辿るが故に、それほど簡単には読みこなせませんが、まあ退職すれば、専らそれに時間を当てるのできるのですから、未完に終わった最後の箇所まで、当方が生きている内に何とか辿り着けるかな、と考えています。

黄金の夏休み

ユタカ君は魚釣り、その他、魚に関係する遊びは小さいときから全くやりません。理由は簡単、川魚の手に触る感触が耐え難いのです。それと鯉コク等、魚料理の中でも癖のある魚のにおいが鼻を突いて、食べるどころか見るだけでも吐きそうになります。昔はよく、田舎の区所有の池の水を抜き、川魚をつかみ取りしていましたが、それら川魚の強烈なにおいに、特別料理上の手心も加えず、醤油と砂糖で煮ただけのママ、食卓に出されてみると、一寸口先に乗せただけで、ゲーツという感じになったのでした。しかし泳ぐこともできないのに川へ出かけ、深みにはまって溺れ、危うく命を落とすようになったことがありました。呼吸ができず苦しい極限まで達すると、意識がポーッと遠のいていきそうになります。その瞬間、幸にも助け上げられました。あの苦しい状態はその後、繰り返しフラッシュバックのようによみがえりました。今でも意識のどこかにその傷跡を引きずっています。死に損なったことは、自分の胸だけにしまい込み、家族に語ることはありませんでした。しかし別の年の夏休み、同級生の妹が川で溺れ、仮死状態のママ引き上げられ、

彼は自転車を駆って助けを求めに懸命の思いで走りましたが、妹が息を吹き返すことはありませんでした。毎年のように川で溺れて、幼い命をなくす者のなんと多かったことでしょう。ユタカ君はその後、絶対泳ぎを覚えなければならぬという命題を背負って、かなり泳ぎが上達しました。また明善高校の時には、物故者名簿にでている水泳部の「阿部一文」君に、平泳ぎの要領を教えてもらい随分と水泳が楽しいものになりました。彼とはあるとき偶然、久留米のダンスホールでも会ったことがあります。水泳で泳げるか、泳げないかの境目は、息継ぎの呼吸ができるかできないかという単純なことに過ぎません。従って、初心者に泳ぎを教えるときには、どうやって息継ぎをするかを習得させれば、もうそれで終わりです。ユタカ君は洋子さんとよくプールへ出かけては、我流のスローペースで泳ぐことがしばしばあります。実は明善文芸部の「楠田拓也」も、連絡先不明者に出ています。我流のクロールで気持ちよく泳ぐ様子を宝満川で何度と無く見たことがあります。また物故者名簿の「井手 泰」君もクロールが上手でした。もっとも彼は明善の野球部出身で、スポーツ万能でした。物故者の名簿にその名を見つけて、少し驚いたのは、阿部、井手君の両名に限られません。ついでにいうと私は「物故者」と「ご冥福をお祈りいたします」という言葉が嫌いで、感覚的に受け付けられないのは、川魚と同じです。そのくせ「物故者」を何度も使用しているじゃないの！と言われそうです。

リバー・ポリス

田中チュウ性は、田んぼの中ちゅう意味バツテン、広か畑ば持ッチョットたい。イモ女じゃなかバツテン、イモばかり収穫しとったノー。家んなかに穴ば掘って、そこでイモに冬ばこさらすとバツテン、よおぎょうさん腐らしよったモンね。イモの収穫の作業は結構大変じゃった。三本鋤で掘り繰り返したサツマイモを集めて回るのは容易じゃなか。一列が長すぎて、何十列もあるとタイ。日が暮れかかっても、とうしゃんは作業を止めらんしゃいとタイ。ホんに子供ごころになさけなかつたの。ところで奥さんの、松川チュウ性は、松と川じゃけんど、海が好きで、しょっちゅう海で貝堀りばかりしよったつばい。中津の海は遠浅じゃけん、干潮を見計らって、潮干狩りに出かけるとじゃい。大石チュウ性は、大きな石じゃけんど、あんまり大きな石のなか小さな石ばかりの小川で、魚釣りばすつとが性分にあつとるとデショ。魚釣りからは縁遠いユタカ君の居場所は、畑の土じゃったのお。そこは甘柿渋柿、柿の木がばさらかあつたバイ。馬鹿ドンが渋柿をちぎっては噛みついただけでほっぽり出して投げ捨て、あたり一面、その残骸で一杯じゃつたとよ。歯形がのこつとるケ、すぐ分かるバイ。甘柿ももちろん食いちぎられて、柿ん種があたり一面ちらばつとたばい。そいでもだいか子供が捕まって油ば絞られるコツもなかつたモンね。昔はおおようじゃつたけん、いたずらのし放題じゃつたつバイ。今みたいにせこい世の中になつたんはどうしてジャロかいの？

ばあちゃん、千葉に行く

「洋子ちゃん、ヨーロッパに行く」と題して、彼女のペンフレンド、オランダ人ヨハンナとの旅の顛末を語ることにしましょう。オランダ、ドイツのベルリン、オーストリアのウィーン、フランスのパリを巡る 20 日にも及ぶ二人旅です。ヨハンナは以後、彼女の署名と同様にジョーと呼ぶことにします。ジョーはかつてオランダ人一行と日本を訪れ、洋子さんが彼らの通訳ガイドツアーをしました。洋子さんの持ち場は九州沖縄で、外国人を乗せた大型客船が長崎や鹿児島、沖縄に寄港すると、彼らのガイドとして案内することになります。または九州何日間ツアー等という企画にも随行します。使用言語は英語です。洋子さんは高校では英語が得意だったのに、大学は独文に行くという変わった人です。英会話部員が英語を得意げに話すのを見るのがイヤだったようで、ネイティブの英語教師が近づいてくると、出会うのを避けて、近くの教室に逃げ込んだなどと言っていますが、独文の単位と平行して、英語教員免許に必要な英語関係の単位も取得したくらいですから、本当のところ、話し言葉は駄目でも、英語のできる女の子だったことは確かでしょう。何でも英語の成績は山口大学入学生のトップ 3 だったという話もある程ですから。独文をでて大学院に行きたかったものの、親から反対されるとあっさりあきらめ、ある陶芸家のお手伝いなどをしておりました。しかしそれから何年経っていたでしょうか、英語の勉強を再開し、英語検定 1 級、通訳ガイドの免許を取得したのは随分後のことでした。などなど.....かくして偶然知り合いになったジョーのメールフレンドとして、しょっちゅうメールのやり取りをしていました。ジョーは英語の先生を長くしており、英語に堪能だっただけでなく、若くしてこの世を去ったご主人が、国連の仕事をしていたためか、あるいは戦時中インドネシアに両親と住まっていたからか、インターナショナルな視点を持った実に頭脳明晰な、日本に関心のあるレディでした。加えてオランダ人は、蘭学のその昔から、世界中のどこにでも出かけていくことに何の躊躇も感じない、実に国際的実務的な国民です。また諸問題に対するその実際の解決方法は、我々日本人にもっとも欠けているもののように思われます。オランダ人とオランダ的問題との向き合い方は、実に興味をそそるもの

があります。ジョーは再び日本を訪れ、我が家にも滞在しました。ユタカ君は運転手として彼らの九州巡りに随行しました。それを契機にユタカ君はオランダ語の勉強にも精を出すことになりましたが、もっと早くオランダ語と蘭学の世界を知っていたら、それなりの関心と時間を掛けることができたでしょう。もはや年を取りすぎており、一から始めるには少々時間が足りません。オランダ語の世界から、福沢諭吉の『福翁自伝』や司馬遼太郎の『胡蝶の夢』に一寸だけ関心を向けました。司馬遼太郎の物事のとらえ方は、ユタカ君の好みとは遠くかけ離れていますが、まあこちらは何かや述べるだけの力はないのですから、好悪を語っても意味はないでしょう。横道にそれすぎました。実は洋子さんの詳細な旅行スケジュールを書き記すはずでしたが、もはやその気は失せてしまいました。

「ばあちゃんな字ば書いたり読んだりでけん。途中で迷い子にならんごつ……」これは不思議な魔法のような言葉です。

私は「夜を生きる（暗闇の中で見る。ある盲人日記から）」という翻訳を HP に掲載していますが、この盲人も最終的に書いたり読んだりデケンことになっていくのです。しかしそこに語られる世界は、実に豊かな健全人の想像できない不思議なものに満ちあふれています。たとえば次の文章はどうでしょう。

私が入りに挨拶し「いい天気ですね！」と言うと、時として、まったく反応がないかあるいはびっくりした様子を見せるかだ。いい天気というイメージは、なかんずく視覚的なものだ。空が澄み渡り真っ青なのが、いい天気だ。私にとってお日様の位置を占めているのが風だ。だから、爽やかな風の吹く日がいい天気の日だ。そよ風は私の周囲にいろんな物音を鳴り響かせる。木の葉がさわさわと揺れ、紙切れが歩道の上を吹き飛ばされてゆく。大きな建物の壁や角っこを撫でながら風が通り過ぎてゆくと、それまで以上に力強くこれらの物が立ち現れてくる。その風を私は髪の毛や顔に、また私の持ち物で感じる。

暖かい一日でありさえすれば、それが多分とてもいい天気の日でもあるだろう。しかし雷が鳴るともっとわくわくした一日になる。雷鳴は突然、空間と距離の感じを伝えてくれるからだ。私にとって雷は頭上にドームを、つまり、ごろごろという音から成り立つ高いアーチ型の覆いをつくりあげる。雷鳴を聞くと自分が広々とした場所にいるのが感じられる。前には反対にぜんぜん何もなかった場所で、目の見える者はいつだって頭上にドームを持っている。青い空とか雲とか、あるいは夜の星といった形で。盲人が同じことを体験するのは、木々が風のせいでざわざわと揺れるのを耳にするとときだ。この音によって、まるで魔法のように木々が身近に出現する。樹木に取り囲まれるのだ、前には何もなかったところで。

あるいは次の文章は？

少しでもまだ何かが見える間は、私はエコーによる方向感覚に気づかなかった。まず最初の経験は、夕暮れの静寂のなか、キャンパスを通り抜け家路をたどっているときのことだった。自分にとって障害物だと思える物の存在を感じたのだ。この感じでは私は立ち止まり、白い杖をあたりに振り回した。すると木の幹にあたった。木は私から1メートルか、1メートル半たらずしか離れていなかった。何かの場所を突きとめる能力は、明らかにこの範囲に限られていた。私は通り過ぎる木々さえ数えることができるのを発見した。この感覚器官は、例えば対象物が街灯の支柱のような細いものでは、まずどうにも働かないようだった。

月日の経過とともに、この知覚能力はさらに高まるように思えた。今日では、街灯の柱の方へ近づいていくときにはそれとわかることがしょっちゅうある。歩いていく方向に柱が立っていると予想すれば、つねに、それまでよりも簡単に場所を特定できるものではあるが。エコーによる方向感覚を感じれば、間違いは回避される。とは言っても、対象物を知覚したがそこに何もなかった所では、私は目印になるものをひとつとして思い出せない。不運なことに、この現象は必ずしも常に現れるとは限らないのだ。だから、赤ランプのようにそれを利用できるにすぎない。何かを探知すれば、私は立ち止まらねばならない。しかし、何ひとつ場所が特定できなければ先へ進めないことになる。

歩いていく道のある地点で、登りになっている階段を避けて、私はわき道へ入らねばならない。毎日この道を歩いているのだから、その階段はもちろん予期できる。にもかかわらず現に今、予期するだけでなく階段の登り道も感じとれる。しかも、道路のすぐ上の階段の下の方だけでなく、その場にそびえ立つ大きな対象物の全体を。この現象の一部分は、私がどれくらい注意深いかにかかっているようだ。というのも自宅では、ドアの角にぶつかるなんてことはたやすく起きるのだから。とても近くにあることに、あらかじめ注意を払っていなかったのだ。

エコーによる方向感覚はすごく異例なものだ。だから、これまで体験した何ものとも比較できない。物理的な圧力みたいなものだ。身を守るためには、手をあげようとするだろう。それほどこの知覚は集中力を必要とする。何よりもまず驚いて跳びのくのだ。この知覚にとって特徴的なのは、あきらかに大気中のある種の静寂だ。本来、空気の流れやある種の空間的広がりを知覚するような場合には、静寂を感じとるものだ。ある強い力を。空虚なものではなくて規定しようのない密度の力を。この感じとる力の正確な起源は明らかにしがたいが、見るところ脳髄に由来するように思える。しかし、肩先や両腕にまで及ぶことも頻繁にある。周囲が騒音で汚される度合いが少なければ、感じる力はいっそう強まる。だから夜遅い時刻、家路をたどる静寂のなかでは感じとる力をもっとも強く発揮できる。

最後にもう一つ。

今日の晩の9時頃だが、外出するために私は服を着た。表のドアをあけると雨が降っていた。数分間、私はその場に立ち尽くした。この美しさにすっかり沈みこんでいたのだ。雨にはあらゆるものの輪郭をきわだたせる特性がある。以前見えなかったものの上に多彩な覆いを投げかける。以前は遮断されていた世界、それ故バラバラに砕け散っていた世界に、一様なリズムで降りしきる雨は音響的知覚という連続性をつくりあげる。

頭上ではぱらぱらと屋根を打つ雨の音、私の左右の壁を伝って滴り落ちる雨。雨樋からあふれ、私の左手の地面にざあざあと落ちる雨。そして左手の更に先の方では、もっと明るいぴちゃぴちゃという雨音をたてている。そこでは雨音がほとんど聞き取れないくらいだが、葉の繁った大きな灌木に落ちている。右手ではもっと低い様な響きをたてながら、雨が芝生を叩いている。右側は登りになって小さな岡をなしている芝生、この芝生の輪郭さえわかるくらいだ。ここでは雨音の響きがちがう。そうして地面の曲がり具合を教えてください。

更にずっと右手では、雨が垣根を打つ音が聞こえる。うちの土地と隣の境をなしている垣根だ。前方では、小道の縁と下っていけば庭の門に通じる階段を、雨が模写してくれる。ここでは階段の石に雨があたり、平らな水溜まりに飛び散っている。すでに水溜まりになっているのだ。ひとつの階段から次の階段へ滴るところでは、ここかしこに小さな滝ができています。

小道の上では、右側の芝生を叩く雨音とは響きがまったくちがう。それにまた左手の大きな灌木では、ぜんぜん音がちがうのだ。まるで覆いで包まれているみたいに、重々しい腫れぼったい響きがする。更に遠くになると、もう音の響きはうまい具合に区別できなくなる。道路に降り注ぐ雨の音、自動車のしゅーっという音、両方向に通り過ぎる車だ。また道路の曲がり角の側溝で、あふれた雨水がごぼごぼというの聞こえる。

これらすべての情景は、私が記述できるよりもはるかにもっと繊細なものだ。というのも、この規則的なリズムはいたるところで少し邪魔がはいったり、間延びしたり、ずらされたりするのだから。短い中断あるいはほかのリズム、あるいは別の反響を、更に細部にまでつけ加えながらこの情景が補われるときには、全体の上には、まるで風景に降り注ぐ光のように柔らかな背景をなし、ぴちゃぴちゃという音が注がれる。そして全体は、絶えず降り落ちる雨の眩きとなって濃い彩りを示す。

これはとても素晴らしい美の体験だ。私は、まるでヴェールに覆われていた世界が突然、そのヴェールをはぎ取ったような感じを抱いた。雨は優しい。雨が私にプレゼントをくれたのだと思う。世界という贈り物を。私はもうひとりぼっちじゃない。自分だけの考えに閉じこめられてはいないのだ。私の肉体がどこに存在し、何ごとに出会うのか、そういう心配をする必要はない。私はある総体的なものをプレゼントされたのだ。私に語りかけるひとつの世界を。

お迎え、と泰造、ばあちゃんの死

「そんなとき、ばあちゃんな、なんかし残したごたる気のしてね、こげん言うた。仏さん、あたしゃ忘れもんばしてきたごたる。」

「おまえたちやまーだ満州におっとか、日本人はみーんな引き揚げて来らしたぞ」

「ばあちゃんが死ぬとは、浄土に生まるるのと同じこつたい。」

あとがき

「境内に建てられたコンクリートの建物の壁に何百というマッチ箱のような集合墓」と「放置された先祖代々の墓地跡」の関係はどうなっているのだろうか？つまり「集合墓」は納骨堂として、先祖代々の死者の骨を納める機能は司っていないのだろうか？集合墓は納骨堂ではない、単なるお飾りの象徴に過ぎないのだろうか？焼かれて骨になった者、あるいは土葬された者の行き着く先は、「また無一物で土に還っていかんやならん」ことがそもそも定められた運命にしても、行く先しれぬいずこなりや？

すでに「昔」と言っても良いかもしれぬ何十年も前のことだが、文芸雑誌「文学界」だったと記憶するが、「骨」という小説を読んだことがあった。その粗筋は、土葬されている先祖代々の死者が葬られている墓地から、土に帰っていない骨を掘り出して、新たに建設された納骨堂に納めるといっただけの簡潔な話である。その後、きわめて奇っ怪ながら、西鉄電車沿線の住宅都市に変貌していく「小郡」というユタカ君が住む田舎の村で、墓地が次から次へと掘り繰り返され、残っている骨が取り出されて納骨堂に納める作業があちこちで行われることとなった。その土地は、個人や不動産会社の売り出す住宅地として提供されることになっていった。墓地を飾り立てていた、苔むした年代物の墓石の群れは、どぶ川の溝の側溝石として、戒名をあるいは先祖代々の文字を見せる無惨な姿を浮かび上がらせることもあり、その捨て場もない墓石群の行方は、誰にもはっきり知られているわけではなかった。自分の住宅地の経緯について何も知らず、建て売り住宅を購入する都市からやってきた新参の侵入者たちは、昔の墓地の上の一戸建て住宅で平穩な暮らしを始めただろうが、墓地跡であるが故に幽霊が出るわけでもなく、怨霊に悩ませられることもなく、家の長期に渡るローンの支払いに苦慮したことはあつたかもしれぬものの、平々凡々たる暮らしは今も変わることなく続けられているであろう。あるいはひょっとして世帯主の病氣故に、住宅もその土地もすでに人手に渡っているかもしれぬ。否、もはやローンの支払いはすでに終了し、購入者の次の世代の所有になっているかもしれない。

*結びに代えて

「ちゅうちゅうまんげのぼうめいて」を何故ユタカ君は面白いと感じることができたのか？その理由を幾つか挙げて、一応、結びにすることにしましょう。

1) 関口存男の言う扮役的語り口の面白さ。

この詩の作者は、ばあちゃんに成り代わって、つまり扮役的語り口を見せながら、それと同時に、聞き手としての役も務めるという二重の役回りを受け持っている。これは簡単なようで意外に難しい役回りである。何故なら恐らく二人の間には 50 年以上の年齢的違いがあるだろうが、これを一人の人物で引き受けることは容易でないことだからである。思い起こす、あるいは出来事が立ち現れるにしても、二人の回想を上手く結びあわせないと、焦点がずれてしまう。しかしばあちゃんに焦点を合わせることによって、親密きわまらない二人の関係が浮かび上がる構造となっている。

2) 詩の言葉として地域限定の地方的方言を上手く使い回したこと。

地方的方言を詩的言語として選択するとき、その理解がどれほどの空間的広がりを受け入れられるかという問題は、簡単ではない。しかし標準語に比重を置いて、部分的に方言的言葉を取り込むことによって、詩的言語の理解度を高めることは可能であり、その方法はむしろ理解しやすさを結果的にもたらす。何故なら方言的言い回しは、いずれの地域においても存在するものであり、理解のとっかかりを手に入れれば、割合容易に理解度を高めることができるし、そうなれば、当然話し言葉として幼少から脳裏に刻みつけられているものだから、深い無意識的概念を呼び出すことも可能となるのではなかろうか。

3) ばあちゃんの語り手としての言語能力

ばあちゃんが文字を書くことも読むこともできないということは、マイナスとして作用するのではなく、反対に文字に左右されない強い記憶力として、物事が立ち現れる際の手助けとして作用することになる。映画的豊かな映像として立ち現れる具体像を、扮役的語り口で語るばあちゃんの背後には、もちろん孫たる作者のばあちゃんと一体化した姿が彷彿として浮かび上がる。これは詩作品が本来、音声学的な音の響きを大

切にすることと密接に関係し、語られた声を耳に聞く原初的な語り部の姿を思い起こさせるものである。

4) いわゆる三途の川から帰還した者としての、特別な体験に裏打ちされた語り部の表現。

作者は危うく命を落としたかもしれぬ貴重な体験から、此岸と彼岸の境目に立つことが感覚的に可能になった。かくして、二つの世界にまたがる人間の内面を凝視する特殊な能力、あえていえば、霊的ともいえる能力、死者の側に立って此岸の人間を生き切る能力を獲得できたのである。これは希少な特別の宗教的体験に近いものなのかもしれない。

2010年1月31日